

活躍する女性を訪ねて【第9回】

さまざまな分野で活躍する佐賀県在住の女性に
前アバンセ館長の村上文（あや）がインタビューしました

佐賀女子短期大学 副学長・こども学科教授（佐賀市）
田口 香津子さん

● プロフィール ●

（たぐち・かづこ）

昭和58年に佐賀女子短期大学児童教育学科の助手となり、講師、助教授を経て、平成17年に同短期大学こども学科の教授となる。

平成24年にこども学科長・専攻科長となり、平成26年4月、同短期大学で女性初の副学長に就任する。

専門は臨床心理学、発達心理学、障害児保育。
NPO法人被害者支援ネットワーク佐賀VOISS副理事長。
NPO法人佐賀県放課後児童クラブ連絡会理事。

（インタビュー：平成26年6月）



● 女性初の副学長に就任

佐賀女子短期大学は女性が開校した女子教育の伝統校で、「こども学科」、「健康福祉学科」、「キャリアデザイン学科」の3学科があります。今から2年前の平成24年、私は「こども学科」で女性初の学科長に任命されました。それまで他の学科には女性の学科長がいましたが、児童教育を学ぶ「こども学科」では、歴代の学科長は男性ばかりでした。任命された時は「荷が重い」と思いましたし、「上をめざして頑張ろう」という意識もありませんでした。

平成26年の4月には副学長に任命されました。これまでの学長や副学長は男性ばかりで、女性の副学長は初めてのことです。候補者はきっと他にもいたと思いますが、「女性を副学長に」という時に、いちばん近いところに学科長の私がいたからではないかと思っています。話を聞いた時は怖かったですね。「私が副学長なんてとんでもない」、「学校は何か間違っている」と思いました。

おっちょこちよいだったり、すぐ調子に乗ってしまったりするところが私にはあります。副学長になるならこんなところは隠さなければいけないのではと思いました。最初の頃はとても緊張していて、「ちゃんと副学長らしくなくては」と、硬く考えていました。でも、学生は「気さくで偉ぶらないところが先生らしい」と言ってくれます。キャラクターを簡単に変えることはできませんし、だんだん「このままの私でいいのかな」と思うようになりました。

● “頑張る女性”を創出する教育を

管理職の会議ではまだ紅一点です。でも、大学の教職員には女性がたくさんいますし、学生たちもみな女性です。私が管理職になったことで、女性の声を学校経営に取り入れるなど、男性にはない視点を活かすことができたと思います。また、女性がもっと力をつけられるということを、例えば「事務職の女性にも役割を与えてどんどん登用しましょう」と提案していくのがこれからの私の役目ではないかと思っています。

もっと高いところをめざして頑張る。こんな女性を私たちが造っていくという意識を持たなければならないと考えようになりました。女性の能力はもっと伸ばせるのです。せっかく副学長というポジションに就いたので、これからいろんな人に伝えていって、思いを共有できるようにしたいですね。女子教育ならではの魅力を私をもっと検証していきたいし、女性の持つ“良いところ”を活かして大学のアピールができればと思っています。



“口答えはしない”と決めた同居生活

田口さんには既に社会人となった3人の子どもがいる。インタビューの前日が誕生日だったという田口さん。ジャケットの左胸には「娘からのプレゼント」という金色のブローチが輝いていた。子育てと仕事をどのように両立していたのだろうか。

私が子ども3人を育てながら仕事を続けてこられたのは、夫の両親と同居したおかげです。夫は県外の大学に勤める研究者で、実家は専業農家です。私も最初は農業を手伝っていたのですが、仕事もありますから、とても身が持たないと思いました。夫の母は本当に働き者で、朝は5時に起きて、掃除をしてから農作業に取りかかります。テレビなどを見るようなこともなく、1日中ずっと働いていました。

「お父さんとお母さんには口答えをしない」と私は最初に決めていました。でも、夫の両親と私とは価値観が全く違いました。「何で男に洗濯物を干させるの？」などと言われた時は、明るく「はい、もう私ができないものだから」、「今は畳んでもらってます」などと答えていました。決してケンカはせずに、「すみませんねえ、できなくて」、「また私が寝坊したから、やってもらってます」、「はい、そうなんですよー」。こんな感じで、ニコニコと明るく受け流しながら、でも自分のすることは曲げませんでした。こうすると「ああ、もう香津子さんには何を言っても、変わらんな」と、あきらめてもらえるのです。

晩年、認知症になった義母は、私が物を取ったと口走るようになりました。優しい義母だっただけに、余計づらかったですね。嫁の私が疑われ、自分の息子や孫はそんなことをする人間ではないと言うのです。口答えは一切しないと決めていたのですが、「絶対取っていませんよ」、「お父さんとお母さんの部屋には1回も入ったことがないでしょう」と強く言ったこともあります。だんだん同居に耐えられなくなって、もう家を出ようかと考えていた頃、新しく子ども部屋を作ったのを機にミニキッチンを作ったのです。そして、「お母さんの場所(元の台所)にはもう入りませんからね」と告げると、途端に「物を取った」とは言われなくなったのです。本当に不思議でした。

その頃から、義父が義母の着替えの洗濯をしたり、昼ごはんを作って義母に食べさせたりするようになりました。今まで身のまわりのお世話をしてもらっていた義父が、今度は義母にお返しをしている。そんなふうにした私は、昼間の義母の世話は義父に任せ、自分や夫は夜間に見ることにして、最期まで家で看取りました。義母にとって私は、自慢の息子をはじめとして、自分の居場所や存在感など、目に見えないものを奪い取ってしまう存在だったのかもしれない。私は心理学が専門ですから、義母が言っていた「取った」にはそんなメッセージが含まれていたのではないかと思っています。そして同居した義母の姿から、女性として悔いのない生き方について学ばせてもらったと思っています。

子育てで退職を考えた時期も

私は職業生活においてはあまり苦労していません。助手だった頃も、私の上にいらっしゃった心理学の先生がとてもよい方だったので、上下関係で萎縮することもなく、のびのびと仕事ことができました。私はいろいろと失敗も多かったのですが、本当は怒られる要素はたくさんあったのだと思いますが、その先生はきっと「仕方ないな」と思っていたのでしょね。あまりひどく怒られたことはなくて、周りの人には私のことをよく褒めてくれていたそうです。相手から直接褒められるよりも、周りの人から「〇〇先生が褒めていたよ」と聞くと本当に嬉しいし、もっと頑張らなくてはと思うものです。私も人の上に立つようになってからは、「この人はすごいですよ」と周囲の人に伝えるようにしています。



勤務校にはとても恵まれていたと思いますが、過去には仕事を辞めようと思ったこともあります。一番づらかったのは、子どもが小学時代に不登校になった時です。私は30歳代でした。その前の年に家族でアメリカに行き、半年暮らしたことが少し影響したのかもしれませんが。当時の私は仕事として「不登校の親の会」に関わり、保護者からの相談に乗っていたというのに、自分の子どもが不登校になってしまったのです。恥ずかしいことですが、「あなたがちゃんと学校に行ってくれないと、お母さんは困るのよ」というような、子どもに対する怒りを持っていたように記憶しています。

最初の頃は「共働きでずっと忙しかったからこんなふうになったのだろう」と考える自分と、「いやいや、そんなことはない」と否定する自分がいました。でも、どんどんマイナス思考になり、「自分が子育てを二の次にしてきたからだろうか」、「そんなつもりはなかったけれど、子どもは寂しいのだろうか」などと不安になりました。この状況を改善するためにどうすればよいかと

考えた時、「やっぱり、この子のためにもっと時間を使わなければならないのかな」と思ったのです。今はもちろん、この時に仕事を辞めなくてよかったと思っていますが、当時は本当に「辞めようか」と悩みました。

助けてくれたのは、職場や「不登校の親の会」の先輩など、私の周りのいろんな人たちです。「子どものために仕事を辞めたら、もっと身動きがとれなくなるよ」、「どうにか解決できるよ」などと言ってきて、「それもそうだな」と考

えなおしました。「辞めたほうがいい」と言う人よりも、「辞めないほうがいい」と言ってくれる人のほうが多かったですね。解決には5年くらいかかりましたが、この時に自分が「子どもに十分にやっていないのでは」と悩んだことは、とてもよい経験だったと思って、講演会でも話しています。いつも成功体験ばかりでは、人の弱さへの共感が失われますからね。

● 小さな勉強会から始まった“VOISS”

講義や論文執筆だけに留まらず、子育て中も3人の子どもを引き連れて、学外の講演会や研修会に参加していたという田口さん。その積極的な姿から、30代の頃は「行動する大学教員」と呼ばれていたという。現在もさまざまな社会活動に携わる田口さんに、犯罪被害者の支援活動を行う「佐賀VOISS」について伺った。

「NPO法人被害者支援ネットワーク佐賀VOISS」の活動には、設立前から関わっています。設立準備会がスタートしたのは平成10年で、虐待やDV、性暴力などが社会問題として広く認識されるようになってきた頃でした。当時、県精神保健福祉センターの所長だった藤林武史先生から「勉強会をしましょう」と声が掛かり、自治体の被害者支援に携わっていた看護師と保健師、そして教員の私とが集まりました。私たちは、援助職の立場でありながら、DVや性暴力などの被害を受けている人たちの大変さを全く理解できていないことに気が付きました。

最初は小さな勉強会でしたが、そこからどんどん輪が広がっていきました。養護教諭などの学校の先生たちが加わり、そして「どうせなら講師を呼ぼう」、「では、講師の旅費を出すために広く参加者を集めよう」という話になって、やがて宿泊研修まで実施するようになりました。こうしていろんな分野から20～30人ほどが勉強会に集まるようになり、被害者支援の仲間意識が生まれていきました。平成12年3月には、“アバンセフェスタ”の会場を使って、電話相談窓口「被害者支援ホットライン」を一時的に開設しました。このことが組織化のきっかけとなり、同年4月に「被害者支援ネットワーク佐賀（VOISS）」が誕生したのです。

もともとは「仕事に役立つから」という理由でみんなが集まって勉強していたのですが、「これからは私たちの力を地域に還元していこう」と、新たに活動を始めたのです。VOISSとはVoice Of Isolated Survivor, Supportの頭文字です。孤立している被害者の声を実際に聴いて、当事者の声から解決策を考える組織に、ということで、声を意味するボイス（voice）から名付けました。被害者に寄り添って、被害者の声を聴いていくこと。これが私たちVOISSの活動の原点なのです。

「市民活動をしている人たちにはすごい人がたくさんいる」、「現場から教えてもらうことがたくさんある」と語る田口さん。平成21年からは、放課後児童クラブの充実と発展のために設立された「NPO法人佐賀県放課後児童クラブ連絡会」の理事長を3年間務め、現在も理事として運営に携わっている。

● 意識を変えると状況は変わる

詩や短歌の創作が趣味だという田口さん。どちらも佐賀県文学賞（公益財団法人佐賀県芸術文化協会主催）の入賞歴があり、自作の詩集も発表している。いちばん調子に乗っていたという30代の頃に比べると現在は創作のペースが落ちているというが、「本当は詩や短歌の方を仕事にしたいくらい」に楽しいという。

大好きな詩人の茨木のり子の詩に『汲む』という作品があります。「大人になっても“ドギマギ”したっていい。そのような繊細な感受性こそ、優れた仕事の核になるのだ」というようなことが書かれています。自分自身のマイナスなところや、みっともないところも認めていけることが“大人”だということを、私はこの詩から教えてもらいました。思いがけずに大学の先生になった私は、あまり立派な教員ではありません。失敗したり、だめだったりするところも含めて、今の自分を受け入れようとしています。

誰もが「人から褒めてもらいたい」、「評価してもらいたい」と願うものですが、それらを他人に求める前に、まず自分自身が周りの人を「すごいね」と認めたり、サポートをしたりして、よい人間関係を作っていくことが大切だと思います。そうすると、よい環境は循環していきますから、自然と自分のことも「頑張っている」、「よくやっている」と評価できるようになり、自尊心が生まれてきます。



茨木のり子の『自分の感受性くらい』という詩には「駄目なことの一切を時代のせいにはするな」という一節があります。「こんな会社だからダメなんだ」とか「親が悪いからこうなった」とか、つい周りに責任転嫁してしまいがちですが、何でも他人のせいにはしないで、まずは自分自身の意識を変えていくことです。自分の気持ちを切り替えることができれば、他人に評価を求めなくても状況は変わっていくのだと思います。

学科長になった時もそうでしたが、一教員として好きなことを言っていた時代から、責任を持って大学を取りまとめなければならぬ立場になりました。これからは女性教職員の育成も考えていかなければなりませんし、みんなが働きやすいように配慮して、満足度を高めていかなければなりません。大学の教員は基本的に「自分の考えや要求を貫きたい人たち」の集まりです。でも、大学の力を最大限に引き上げるためには、自分だけ良ければいいというわけにはいかないのです。副学長になってしばらくは、“先輩”の先生方に対する気持ちの切り替えが大変

でしたが、周りの人を褒めたり励ましたりしながら、若い人たちに頼られるような上司になりたいと思っています。

インタビューを終えて

田口さんのお話には、よい仕事をするためのヒント、よい人間関係を築くためのコツがいっぱいつまっています。

エネルギーに多方面の仕事をされており、県内の大学・短大では女性初の副学長となり、女性教職員のキャリア開発にも目配りし、みんなが働きやすいように尽力しています。また、被害者支援のNPO法人被害者支援ネットワーク佐賀VOISSを創設し、活動していることでも有名です。小さな勉強会からスタートし、仲間ができて活動が広がり、組織化につながりました。VOISSは、現場のニーズを踏まえて、地道に一步步経験を積んできました。その結果、成果も上がり、警察からの評価とサポートも得られるという好循環を生んでいます。心労の多い被害者支援を、組織的に継続して実施していること自体、大変な社会貢献です。この他にも、放課後児童クラブの充実のための団体の運営にも携わっています。「現場で、汗を流して市民活動をしている人に教えてもらっている」と言われますが、問題の生じている現場に密着しているからこそ、効果的な解決策も編み出せるのだと思います。

また、こうした仕事を続けながら、3人の子を育てています。夫の実家は農家で三世代同居でした。一般に、三世代同居では、共働きの子育てを助けてもらえて便利な面はありますが、感覚や価値観も違って、嫁の立場から見れば辛い思いをすることも少なくありません。田口さんは、姑から家事を夫に手伝ってもらうのを咎められても、明るく受け流しています。普通なら、自分が頑張りすぎて疲れ切ったり、口答えして姑と陰湿な関係になったりしかねないところです。価値観が違って、軽く受け流すことにより、姑があきらめて事態が収まっていく。相手の期待に沿えないときの対応として、参考になります。また、姑が認知症になったときも、台所を別に作り、姑の居場所を確保することによって落ち着き、最期まで自宅で看取っています。「義母にとって私は、自慢の息子をはじめとして、自分の居場所や存在感など、目に見えないものを奪い取ってしまう存在だったのかもしれない」というのは、惻然な分析だと思います。自分を生かしながら、柔軟に対処していく田口さんの知恵に学ぶところは大きいです。



また、詩や短歌の創作が好きで得意というのもしばらしいです。創作は、鋭敏な感受性が大事です。また、人を感動させるには人間に対する深い理解が必要でしょう。茨木のり子の詩のように、思い通りにならないことを他人のせいにしなくて、自分自身の意識を変えていく。まず、自分が周囲の人を評価し、サポートして、よい人間関係を作っていくことが大切とのこと。よい環境は循環します。主体性を持って自分で考え、行動することによって、状況を変えていく気構えを教えてください。

アバンセ館長 村上 文

[◀ 戻る](#)

[↑ このページの上部へ](#)

アバンセ 佐賀県立男女共同参画センター
佐賀県立生涯学習センター

[アクセス・交通機関のご案内](#)

[お問い合わせ/ご意見・ご要望](#)

アバンセ
佐賀県立男女共同参画センター・佐賀県立生涯学習センター

〒840-0815
佐賀県佐賀市天神三丁目2-11(どんとんどの森内)
TEL:0952-26-0011 FAX:0952-25-5591

【指定管理者】公益財団法人 佐賀県女性と生涯学習財団

Copyright (C) 2011 Avance All rights reserved

開館時間

火曜～土曜日:8時30分～22時00分
日曜・祝日:8時30分～17時00分
(ホールは22時00分まで)

休館日

毎週月曜日(祝日も含む)
12月29日から翌年1月3日まで